

# ちよめんぶつこうご

## 第二四〇号 頼るべきは

「心が口に口は禍の門と言ひ、口は心に邪心を起すなど言ふ」「手は足に具足十念といい、足は手に合掌せよと言ひ」、「眼は耳に耳で見よといい、耳は眼に、目で聞けという」。面白い問答である。

法然上人様は我々が救われる道は単に、「口称念仏」、お念佛を称えるだけで良い、と言ふ教えを提唱されたので一般大衆が飛びついたのである。現社会もそうであるように、**一般庶民が知らない事を知識として持ち合わせる人を偉いとする風潮があります**。それと同じで、当時でも学問をして、覺りを得た人を覺者として崇めたわけです。昔は位のある人しか勉強できませんでした。法然上人曰く、罪の軽重では無く、念仏で間違ひなく極樂に往ける訳で、知識が豊富であつて、一般に偉いと思わせる人が極樂に往ける確立が高い訳でもなく、法然上人が智者の振舞ひをせず、と釘を指したのも極樂に行くには必要のないことだと申されました。「口称念仏」する事で、信心に苦痛がなくなり、快樂になつて、極樂に往生していく、**極樂即ち、浄土でありますから、浄土宗と命名され、開宗依頼今日に至つています**。だが、あまりにも簡單と言ふ事は安いものを粗末に扱ふに似た現象が起ることを憂慮するのであります。明恵上人や根来寺を開創された覺鑊上人の、思想を心に留めたいと思ふのであります。

現代にも通じる念仏を広めた僧侶に、空也・一遍の両上人がみえます。空也の念佛、或いは一遍の踊る念仏です。現在、創作舞踊が主流で老若男女問わず、踊りを楽しんでいます。今、念仏も情熱的に踊れば一切の事を忘れさせ、ただ念仏に陶醉でき、念仏が念仏を称えているよう感じ、經にも「入我我入」とあり、正しく弥陀の浄土に往けるかもしれません。その気持ちよさに、念仏踊りが大流行するかも知れません。

「はかなしな しばしかばねの くちぬほど 野原の土は よそに見えけり」と詠んだ上人がみえます。自然災害を見ても、我が身に遭遇するまでは他人事であり、我が身に降り掛かると初めて現実に驚き、悲嘆にくれるのです。世事に追われ計画は立てるものの、最も大切な命のことは考えもしないのである。明日が命終に成るかも知れず。我々は毎度申すとおり寿命の果てる時を知る由も無いのである。最も重病になれば、お医者様に余命〇〇ですと、宣告されます。それでもアバウトであり、正確ではないのです。阿弥陀様が何時、観音菩薩・勢至菩薩等を伴つてお向かいに来て下さるのか、日時を知ることが出来ません。

水上 勉氏は病に冒されて入院されたのを機に「**今日生きているぼくは、実は生きているのではなくて生かされている。そのことをつくづく思う**」。と書いて見えます。生かされている時は良いのですが命終が大変です。初めての体験と成るからです。頼るべき如来、阿弥陀様の存在も知らない、阿弥陀様の顔も分からない人が多いのではないのでしょうか。当山の御本尊一光三尊善光寺如来様、ご縁日の七草法要が勤まりました。一年に一回、七草法要の時に、来迎仏の掛け軸をかけ、我々が命終を迎えた時、二十五菩薩を伴つて迎へに来て下さる姿を拝んでいただきます。御縁に合うこと無く死ねば、魔に騙される人が多いのではなからうか、SNSと同じで、私は心配するのです。肉体を支えてきた魂の存在は、魂は生まれてきた時すでに存在しています。故に肉体が死ねば魂は何処に帰つてゆくのか、目に見えないから厄介である。多分、極樂に往くか、また何処かの誰かに、移り住むのか。魂は永遠に不滅なのであろう。

令和二年二月一日

善壽界善入院油掛地藏尊